



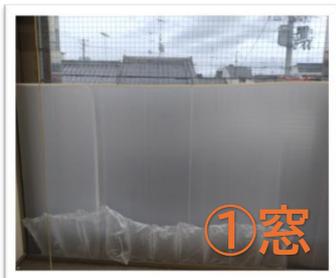
事業所でのエコな取り組みをご紹介します！

総合ケアステーション太秦安井の取り組み紹介

感染対策に換気は欠かせませんが、それでも窓やドアを閉めているときは暖かく過ごしたいですね。

総合ケアステーション太秦安井では窓際(①②)に冷気ストップパネル(+緩衝材)や断熱ボードを設置して、暖房効果を高めています。具体的に室温を計ってはいないですが、体感として窓際から感じる冷気は緩く感じます。

最近では窓ガラスだけでなく玄関(③)の自動ドアの前にも断熱パネルを設置して(すぐ動かさず)、冷たい空気が入りにくい工夫をしています。患者さんや利用者さんが頻繁に出入りするドアは不向きですが、職員通用口などは使えるのではないのでしょうか？



①窓



②窓



③玄関



ふくちやま協立診療所の寺本所長の記事が第3209号 2026年1月10日 京都保険医新聞に掲載されましたので要約した内容をご紹介します。

(<https://healthnet.jp/wp-content/themes/main/pdf/paper/h3209.pdf>)

2030年までにCO₂半減

— 私たちが今日からできること —

インタビュー:兵佐和子副理事長

近年、平均気温の上昇は「地球沸騰化」とも言われ、猛暑や豪雨災害の頻発など、私たちの生活と健康に深刻な影響を及ぼしている。しかし、命と健康に直結する問題であるにもかかわらず、医療者からの発信は決して多いとは言えない。そこで環境問題に取り組む医療者団体「一般社団法人みどりのドクターズ」の寺本敬一医師に話を聞いた。

「みどりのドクターズ」は2022年、環境問題に危機感を抱いた医師たちが立ち上げた団体で、現在は北海道から九州まで約100人の医療従事者が参加している。医師だけでなく、看護師

や薬剤師、弁護士らも加わり、勉強会や情報発信を通じて気候変動対策を推進している。背景にあるのは“プラネタリーヘルス”の考え方だ。人間の健康は地球環境の健全性と切り離せないという理念であり、気候変動は将来の問題ではなく、すでに命に直結する現実の問題であると捉えている。

寺本医師が環境問題に本格的に向き合うようになったきっかけは、福知山市で経験した水害だった。自宅が床下浸水の被害を受け、「50年に一度」と言われる災害が続く現実に直面したことが転機となった。その頃に出会ったのが、ポール・ホーケン著の DRAWDOWN ドローダウンー地球温暖化を逆転させる 100 の方法 と Regeneration リジェネレーション である。温暖化は止められないものではなく、やれることを積み重ねれば逆転できるというメッセージに希望を見出したという。

医療分野も決して無関係ではない。日本の温室効果ガス排出量の約 5%がヘルスケア領域に由来するとされる。無駄な処方や残薬、定量噴霧式吸入器に含まれる高温室効果ガス、単回使用医療機器の大量廃棄など、見直すべき点は多い。寺本医師は「無駄な検査をせず、必要な医療を行うことが基本」と強調する。入院は外来よりも温室効果ガス排出量が多いため、外来で可能な治療は外来で行うこと、さらに運動習慣の推進による疾病予防も重要だ。健康づくりはそのまま排出削減にもつながる。

参考となる動きとして、日本プライマリ・ケア連合学会 が 2024 年に発表した「プライマリ・ケアにおける気候非常事態宣言」がある。具体的なアクションプランも示されており、できることから始めることが呼びかけられている。

世界の平均気温上昇を産業革命以前から 1.5℃以内に抑えるためには、2030年までに CO₂ 排出量を半減させる必要がある。「まず知ること。しかし知っただけでは絶望してしまう。次に、できることを実践することが大切です」と寺本医師は語る。

猛暑のため子どもが外遊びできない夏は、成長や発達に影響を及ぼしかねない。気候変動は未来世代の問題ではなく、いまを生きる子どもたちの問題でもある。「私たちの世代で止めなければ間に合わない」という強い危機感のもと、地域での啓発活動も始まっている。

気候変動対策は特別な誰かが担うものではない。医療者として、また一人の市民として、無駄を減らし、正しい情報を学び、行動すること。その積み重ねが 2030 年への道を切り開く。今こそ、健康を守る視点から環境問題に向き合う時である

できることから始めよう！

